名古屋大学　21世紀COEプログラム
「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」
http://www.coe.env.nagoya-u.ac.jp/
January 2005
SELIS ニュースレター 第3号

新しい「地球学」への胎動 ―これまでの活動総括と今後への展望―

拠点リーダー 安成哲三（地球水循環研究センター）

本 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」も、開始以来 1 年半が過ぎ、これまでの活動を総括し、今後の方針を考えるべき時期にきました。このプログラムが採択された時、21 世紀 COE の審査委員会から出された宿題あるいは懸念が、「このような広いテーマでの研究・教育における連携と協働をどのように行っていくのか、いけるのか」という内容でした。もちろん、まだ完全な解答を準備できている段階ではありませんが、研究、教育サイドとも、確実に進んでいることをまずお伝えしたいと思います。

この COE プログラムは、拠点メンバー教員、研究協力教員、ポスドク研究員および DC 研究員（Research Assistant）がその活動を担っていますが、この COE を契機として、それぞれのレベルでの、細分化された地球科学の枠を乗り越えて新たな研究を進めようという問題意識と意欲を、私個人はひしひしと感じています。若手の教員とポスドク研究員はこの雰囲気の牽引者であり、すでに 30 回以上にもおよぶ「横断研究セミナー」や横断的テーマの研究会を開いて、部局や組織を超えた共同（あるいは協働）研究グループをいくつか作りつつあります。科研費などの外部研究資金に共同で申請しようという動きにも、一部は発展しています。

また「横断研究プログラム」なども含む（大学院博士課程の院生中心の）DC 研究員によるポスターセッションは、お互いの狭い分野を越えて、それぞれの発表に対してコメントするという、既存の学会のそれとは一風異なる雰囲気で、研究の視野を広める機会を提供しています。博士号取得をめざす院生には、あまり寄り道をさせずに狭い分野で効率よく研究をさせないとダメだという雰囲気が一方では強くあります。確かに博士課程 3 年（以内）で確実に学位を取らせるという指導教官の立場になると、ついつい、そのような気持ちにもなります。しかし、もう一歩引いて、より広い視野で「地球の研究とは何か」ということを考えた時、大学院生がより広く、より長期的な視野と興味を深めて研究を進めるための「寄り道」は非常に大事なことと、私は考えています。「可愛い子には旅をさせよ。」という諺は、研究者養成にもそのまま当てはまると思います。ポスドク研究員だけでなく、DC 研究員も対象とした「横断研究プログラム」は、こうした若者の「旅」をほんの少し助ける重要な機会づくりでもあり、ひょっとすると、「大発見」の場を提供しているかもしれません。

教育面では、連続講義「COE 地球学」を、環境学研究科の特別授業として開始し、関係教官による話題提供と院生による対話形式の講義を試行しています。今のところ、まだ普通のオムニバス形式の講義になりがちであることは否めませんが、しかし、院生による積極的な発言やコメントも徐々に増えてきたようにも感じます。来年度は、研究科の正規の講義として立ち上げ、各教員による「地球学とは何か」の討論を院生諸君とともに行う講義としたいと考えています。

一般向け公開セミナーを、樋口敬二館長(本学名誉教授)のご好意により名古屋市科学館で開催しました。中学・高校生にいかに、地球温暖化を含む「変動する地球環境」の理解をさまざまな角度から解説するという趣旨で数名の COE 関係教員による講演と一般からの質疑応答というかたちで進めましたが、一般の人たちからのたくさんの質問、コメントに、私たち研究者も大いに学ぶことができ、大収穫でした。来年度は、さらに大々的に、「愛・地球博」と共催するかたちの公開セミナーを開く予定です。

最後に、COE の永続的発展を機能させるための新たな「太陽・地球･生命圏システム研究所（仮称）」への動きですが、これもこれまでにのべた研究と教育への連携と協力、共同作業を通じて、おのずとかたちが見えてきたと、私は強く感じています。最も関係する二つの研究所、研究センターとも来年度から新所長、センター長の体制となりますが、新しい研究組織がどうあるべきか、すでに議論が始まりつつあります。

20 世紀における「細分化」による地球理解の壁は、地球を「丸ごと」見る新たな視点で乗り越えるしかありませんが､この方向を目指す本 COE の役割は重大であり、当初の目標に向けて、さらに努力をすることこそが、当面の課題と考えています。